

第1回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

- (1) 議長及び副議長の選出について
- (2) 報告事項
 - ①第3次札幌市生涯学習推進構想について
 - ②地域学校協働活動推進事業について
- (3) 協議事項
 - ①今期の社会教育委員会議の進め方について
 - ②今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて
- (4) その他

2 日時

令和5年(2023年)8月22日(火) 10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

- (1) 委員(出席10名)
出口委員、片岡委員、小田島委員、小野寺委員、中野委員、
松岡委員、今泉委員、安田委員、臼井委員、榊委員
- (2) 事務局(11名)
檜田教育長、木村生涯学習部長、大瀬生涯学習推進課長、
早坂生涯学習係長、釜石社会教育担当係長、田村野外教育担当係長、
中原職員、三井職員、山下職員、鵜沼職員、野上職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者1名傍聴:北海道通信社1名)

6 会議内容

- 配布資料
- 資料1: 札幌市社会教育委員条例
 - 資料2: 札幌市社会教育委員条例施行規則
 - 資料3: 社会教育委員名簿
 - 資料4: 第3次札幌市生涯学習推進構想
 - 資料5: 地域学校協働活動推進事業に係る資料
 - 資料6: 今期の社会教育委員会議の進め方について

資料7：今年度の社会教育委員会議のテーマについて

資料8：昨年度の社会教育委員会議報告書

(1) 議長及び副議長の選出について

議長に出口委員、副議長に片岡委員を選出した。

(2) 報告事項

①第3次札幌市生涯学習推進構想について

ア 事務局から、資料4「第3次札幌市生涯学習推進構想」を用いて説明
以下、説明の要旨

- ・全体の構想について
- ・目的、位置づけ、計画期間について
- ・施策の体系について
- ・具体的な施策の展開について3つの重点施策から
- ・構想の推進について（早坂係長）

②地域学校協働活動推進事業について

ア 事務局から、資料5「地域学校協働活動推進事業」を用いて説明
以下、説明の要旨

- ・地域学校協働活動について
- ・これまでの取組について（課題・課題解決に向けて）
- ・令和5年度地域学校協働活動推進事業について
- ・札幌市地域学校協働活動の効果について
- ・コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の推進体制について
（釜石係長）

イ 主な質疑応答

- ・学校運営協議会が設置されている学校の割合は、どのくらいなのか。
（小野寺委員）

→札幌市ではまだコミュニティ・スクールを導入していないので0%
（釜石係長）

- ・現在、サタデースクールのことをやっている25校は、学校運営協議会とは異なる別の団体としてということなのか。（小野寺委員）

→そのとおり。札幌では、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動を一体的に推進していくということで、コミュニティ・スクールすなわち学校運営協議会の導入について検討、準備を進めているところ。

地域学校協働活動については、平成 26 年度からサッポロサタデースクールという形で、準備のできた学校から活動しているもので、学校運営協議会とは別である。（釜石係長）

- ・聞いた理由は、「地域住民が学校で活躍して、子どもたちと触れ合うというのは、いい社会教育だな」とずっと思い、学校や子どもたちへ地域の者が積極的に関わるためにはどうしたらよいのかよくわからなかった。現在はどのくらいの団体が活動されているのか。（小野寺委員）

→現在の小中学校 28 校で活動されている。（釜石係長）

- ・小学校、中学校合わせて 10% ぐらいの学校で活動が進んでいるという理解でよいか。（小野寺委員）

→その通り。（釜石係長）

- ・地域学校協働活動が以前のサタデースクールから発展的に膨らんでいくと思って聞いていた。どんな団体構成なのか興味をもって見てみたら、屯田南小は子ども会の代表やおやじの会など、学校の代表者がいない中で活動を行っている。これはなかなか面白いと思っている。学校側から校長や教頭が入るとどうしても「じゃあ、お願いします」と、学校側に比重がかかってしまう。会議なども、まちセンなど地域の集会所的などところを使えば、「学校を使って、地域がこんな楽しいことができる」と話がまとまるのでは。学校のホームページからは、地域や P T A などが、地域学校協働活動に参加するにはどうすればいいのか、なかなかわからない。コーディネーターや講師を広げるためにも、地域で活動する若者が中心の N P O が入っている中央小学校のように、間口を広げることや広報をすることが必要ではないかと思った。（松岡委員）

→ありがとうございます。地域、学校、それぞれ実情に応じて、互いに負担のない、やりやすい形で進めている。委員の皆さんの御意見伺いながら、私たちも機を捉え、還元していきたい。（釜石係長）

- ・学校の立場から話しをする。前任校（琴似中）はおやじの会が中心になり、商店街も一緒になって取組んでとてもやりやすかった。

その中で、一番難しいと感じたことは、地域の人々の中からコーディネーターを選び、まとめていただくことだった。

そして、地域から学校へ、どのように関わったらよいのか、学校から地域へどのように声掛けをして、人材を集めていくか、ということも、町内会の高齢化や町内会自体のつながりも薄れていく中でさらに難しくなっている。（小田島委員）

→コミュニティー・スクールはこれから徐々に出来上がっていくものであり、全部の学校が一斉にというものではないので焦る必要はない。

学校運営協議会を発足させて、まずは共有をしていく、そこで話をしていく中で地域と学校との関係が出来上がっていった、何をしたいのかなという話に発展していくことも考えられる。

教育委員会としてもそのあたりも含めて発信していきたいと考えている。（釜石係長）

→補足させてもらう。コミュニティー・スクールとは、一つは学校の基本方針を承認するという役割、もう一つはいろいろな教育活動に対して意見をするという役割をもった会議体で、そこで話し合われる「地域の子どもたちに何ができるか」、「何をすべきなのか」を実現するのが地域学校協働活動である。

学校運営協議会は、いろいろな人が委員として参加し、地域の代弁者として「地域ではこんなことができる」また、学校からは「こういう活動ができる人材はいないか」を活発に話し合う場になる。

今は、それぞれの学校・地域でやりやすいように地域学校協働活動が進められていると思うが、来年度以降、コミュニティー・スクールとはこのような関係性をもって取組を進めていくことによって、意見交換の場になっていくのだろうなと思っている。

具体的には、中野委員が自分の学校で取組んでいるので、その感想や取組んでみての意見など一言お願いします。（出口議長）

- この委員に入り、サタデースクールの活動をより深く知ることができた。自分もやりたいことがあったので昨年、運営委員会を立ち上げてようやく活動を開始できた。

テーマとしたのが学校の先生方への負担をできるだけ避けるようにしたいということ。閉校した常盤小学校のお父さん仲間が集まって、会議をして「夢時間」というものと、一日で練習とリハーサルと本番をやってしまう「一日音楽隊」、そして「ボードゲーム」を行った。会場は学校を使うので、校長先生・教頭先生にはその日に来ていただいた。

「夢時間」については、子どもたちが父母の姿を見て、仕事に行って辛い、大変というふうに感じているのではないかと思い、思い切り自分の仕事の自慢話、夢だけを語って欲しいとお願いして、18人集めて実施した。

これに関しては人を集めるのが大変だった。白石中でも同じメンバーで実践できたが、その経験を踏まえて、全市にこの事業をする計画も立てている。

コミュニティー・スクールと地域学校協働活動がどう関わっていくのかというのはこれからのテーマだと思っている。自分はPTA主体にして動いている。今後もPTAと地域学校協働活動、コミュニティー・スクールというのがどのような関係性なのかを注視している。

(中野委員)

・実際関わっている人の話というのは説得力があるなど感じた。

今後また、必要があれば事務局から報告をしていただきたいと思います。

(出口議長)

(3) 協議事項

①今期の社会教育委員会議の進め方について

ア 事務局より、資料6「今期の社会教育委員会議の進め方について」を用いて提案

以下、説明の要旨

- ・社会教育委員会議の役割について
- ・今期の協議事項の進め方について
- ・令和5年度の会議スケジュールについて（田村係長）

イ 主な質疑応答・意見

→異議なし（全委員）

②今年度の社会教育委員会議の協議テーマについて

ア 事務局より、資料7「今年度の社会教育委員会議のテーマについて」を用いて提案

以下、説明の要旨

- ・「子どもの体験活動の推進」について
- ・体験活動の定義・体験活動の効果について
- ・体験活動の推進に向けた課題と論点について
- ・これまでに実施した自然体験活動の取組について（田村係長）

イ 主な質疑応答・意見

- ・コロナ禍においてこの3年間、体験活動がほとんどできていない。大学で学生と接していてコミュニケーションをとれない学生が多いと感じている。この体験活動に視点を当てたテーマということの重要性というのを改めて感じている。（出口議長）
- ・子どもの体験活動の推進ということで、大変有意義な協議性のあるテーマ

マ設定だと思う。資料では小学校や幼児が主な対象のように感じられるが、対象とする子どもの範囲をどの辺まで考えるのかが一つの大きな視点だと考える。資料7には社会体験活動としてボランティア活動、職場体験活動、インターンシップ等と書いてあるが、例としてはあまりその部分が入っていない。自然体験活動の方に寄っているという印象を受けている。

まず、どこまでを子どもの範囲とするのか。そして、社会体験などをどの辺まで考えるかということが、議論の幅広さに影響すると感じた。

(臼井委員)

→ご指摘の通り、体験活動の範囲は広い。事務局としては今まで取り組んできた自然体験活動をベースにして考えていただければと考えている。そして自然体験活動にとらわれることなく様々な意見を出してほしい。子どもの範囲としては、札幌市教育委員会がこれまで取り組んできた事業の範囲と考え、幼児期から義務教育期間、つまり、中学校3年生までと考えているが、高校生それ以上も議論していただきたい。(田村係長)

→補足をする。これまで札幌市教育委員会が行ってきた事業は、小中学生を対象にしてきた。さらに野外教育施設としては青少年山の家、定山溪自然の村がある。こういった資産を活用して、今後、事業をどう展開していくかということにもなるので、まずはこの施設をどう活用していくか、また、他の施設、いろいろな事業との連携も踏まえながら、議論を進めていただきたいと考えている。基本的には自然体験活動をもとにして社会体験や生活体験というものを要素として加えながら議論していただいてもよいと思う。子どもの範囲としては小中学生を中心として、そこに指導者として高校生や大学生が関われることもあると思う。そのような形で議論を広げ、深めていただければと考えている。まずは教育委員会が行っている取組をベースにして議論を拡大、深めてほしい。(大瀬課長)

・テーマ案について賛成の立場で話をしていく。地球温暖化ということもあるので、自然の中で学ぶということは体験とともに、現在地球が置かれている状況について学ぶことになると考えている。

「第3次札幌市生涯学習推進構想」の中であった図書館の活用の話と結びつけて考えたいと思っている。アメリカのインディアナ州の市は図書館が子どもたちの学習のハブみたいな役割を担っている。図書館は学びの知の集合体である。本を読むことは非常に大事で、今は、AIやChatGPTが闊歩する時代ではあるが、自分の頭で考え、生涯

本を読み続けることは学生にとって、非常に大事だと思っている。ですから、一つのところ(図書館)を拠点にして他の施設や事業と連携して、より深く学べる、土台ができるのではないかと思った。(片岡副議長)

- いろいろな活動を図書館とつなげることは大切。(出口議長)
- 図書館といえば美術館・博物館ということで、例を見てみるとイメージとしては体験活動というとキャンプ、自然とかそういう体験の方が出がちだが、例えば、本物に触れる体験活動という意味では、博物館や美術館に来る子どもたちを見ていると、本物の彫刻に触れる、本物の絵画を見るという、学校で美術の教科書を見るのとはちがう一つの大きな体験、感動を呼ぶ体験になっていると思うので、本物というものに触れる体験も併せて考えていきたい。(松岡委員)
- このような子どもの体験活動の推進というのは非常に大事だと思っている中で、林間学校の事業や、冬の自然体験施設での事業に参加できるお子さんのご家庭と、まったく参加できないご家庭のお子さんというのも非常に多くいるんだろうなと、普段のかかわりから見て思っている。このような事業に、積極的に「参加できます」と行けるお子さんのみならず、そうじゃない、なかなか参加しにくい、例えば不登校であったり、一人親世帯で心身ともに余裕がない、社会の中で孤立しがちな状況にいるようなご家庭やお子さんに対するアプローチというところも含めて、体験活動の推進というところで考えられたらすごくいいなと思っている。(今泉委員)
- 今言われた、参加できる家庭、参加できない家庭があるからこそ、先ほど説明のあった、地域学校協働活動などで、参加しやすい環境をどうつくっていくのか考え、それをつくっていくのも大事なこと。よくよく考えてみますと、自然体験活動をするにあたって、親が行きなさいよとか、一緒に行こうよとか行動を起こさないと、なかなかこの自然体験活動が生活体験などにはつながっていかないと思った。子ども以前に大人に大事だとむしろ思っていて、大人が興味をもたないと、その子どもたちの体験機会は提供されないという、そんな関係性があるからこそ、子どもたちだけでも参加できる環境を、どのようにつくっていくのかということを議論していきたいと考えている。(出口議長)
- 子どもの体験活動の推進でいいかなと思った。今年(2023年)の4月1日に施行された「子ども基本法」の中に「自己に関する事項に関して意見を表明する機会の確保」というところがあり、やはり(子どもから)意見を聞く場をもつ、という視点をもっていただきたいことと、先ほど今泉委員からもお話があったが、本当に余裕のない世帯があつて、

子どもの貧困問題は、子ども自身の「得られるはずの体験の格差」問題でもあるので、そこをどう埋めて行くのか、もう一步深めて、「すべての子どもがこのような体験をできるような枠組み」をどう作っていくのか議論のポイントだなと思っている。（榊委員）

- 家庭によって差が出ないような環境をどうつくっていくのかというのはとても大事だと思う。（出口議長）
- 以前に親子の参加で農家体験をした。一人で出てくるのが苦手な子というのはたくさんいて、親を通しての人のかわりがない子どもは、人見知りが多い、一人で出てくるのが苦手な子が多いので、親子体験というのはとてもよかった。あとはただ行っただけ、1回きりの思い出にしないためにも、収穫から袋詰めまでの、育っていく過程や経済活動みたいなものを目の当たりにすることが、一番体験活動の効果としてあるのではないかと感じている。（安田委員）
- 種まきや収穫だけでなく、最後まで通して一連の体験をすることは大切であり、今後また話を進めていきたいと思う。（出口議長）
- 見ていていいテーマだなと感じたので、コロナ禍でいろいろなものが大きく変わったと思う。我々大人がやる会議にしても対面で参集していたものが全部ズームになったりオンラインになったりした。それを子どもに置き換えると、子どももデジタル端末を一人1台持ってきて、いろいろなものを、体験ではなくて画面上で疑似体験するという機会が一気に増えた気がする。コロナの3・4年間で徹底的に子どもたちの体験活動が減ったなど。今後の課題として「本物を見せる」「体験させる」機会を復活させてほしいという思いでいる。現地に行った時のにおいとか風とか気温とかも含めて子どもたちの体験だと思う。ぜひこれは面白いテーマだなと思って発言した。（中野委員）
- 本物の体験というのは何物にも代えられないと思う。私は山が大好きで、なぜ、苦しいだけなのに山に登るのですか、とか言われるのですが、いつも辛い辛いと思いながら山に登って、なんでこんなことしているんだろうと思いついに登りきると、あの爽快感というのは何物にも代えられない。そして降りているときには次はどこに登ろうかと思ってしまう。やったことのない人に、山の良さを伝えても、なかなか伝わらない。確かにしんどいですけど、それを上回るものがあるから何とか登っているんですね。それをやらないで終わっている人ってかわいそうだなと思ったりする。いろいろな体験をするというのは大事なことだし、また、失敗をするということは何より大事なことだと思う。失敗の経験がない学生と話をしていても、こんなことをやったら他の

人から攻められたらどうしようって口籠ってしまって。学生は、私は傾聴力高いのですと言うのです。話を聞くことはできても意見を言わないとダメでしょう。そんな傾向の学生たちがたくさんいることからするとやっぱり、たくさん経験をして失敗をして失敗をもとにして次つなだったときにどうするかってことを考えるのはとても大事なことだなと思う。そんな事柄についてこれから皆さん方とぜひ、いろんなご意見を踏まえながら進めていきたいと思いますので、今期につきましては子どもたちの体験活動の推進について皆様方と協議をしていきたいという風に考えています。（出口議長）

(4) その他

次回の会議は、11月中頃に開催予定である。詳しい日程調整については、後日事務局から依頼する。

